

学園

平成17年 8月 1日発行

財団法人

中国四国酪農大学校

電話 (0867) 66-3651

FAX (0867) 66-3652

E-mail jerko@mx4.et.tiki.ne.jp

<http://ww4.et.tiki.ne.jp/~jerko/>

だより



第41期生 蒜山登山 中蒜山山頂にて

巻頭の言葉

校長 有 富 敬 典



本年四月
一日付け
で、第十八
代目の校長

を拝命いたしました。

過去において第二牧場、教務課、次長と通算して六年の酪農大校勤務の経験がありますが、こういった経験を生かしながら心機一転して学校運営、学生教育に取り組んで参る所存でありますので、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

本校は、昭和三十六年に創設されて以来四十一年目を迎えますが、その間一、〇七五名の卒業生を送り出し、全国各地でそれぞれの方々が酪農経営者あるいは指導者として大いに活躍をされており、そのお陰によりまして、今や全国に周知の(財)中国四国酪

農大が学校となって参り、関係者一同誠に喜ばしく思っております。

ご承知のとおり我が国は、豊かで多様な食生活を享受している反面、食糧の多くを輸入に依存し、食糧自給率は主要先進国のなかで最低の水準となっており、加えて、今後世界の食糧需要が長期的には逼迫するという懸念もあることから、国を挙げて食糧自給率の向上に向けた様々な取り組みが行われているところでもあります。

しかしながら、関係の深い酪農及び肉用牛についてみると、十年前の平成六年に對比し、酪農では、戸数において約二〇、〇〇〇戸、飼養頭数で約三三〇、〇〇〇頭減少しており、肉用牛においても飼養頭数はほぼ横ばいで推移

しているものの、戸数は約九〇、〇〇〇戸減少し、自給率は、牛乳乳製品が約七十%、牛肉が約四十%というのが現状であります。

特に飼養戸数は、酪農、肉用牛ともに年々減少を続けておりますが、この原因のひとつとして、後継者、担い手不足が考えられ、食糧自給率向上の観点からも従来から生産現場を担当する担い手の育成・確保は最重要課題と位置づけられてきております。

こういったなか酪農大校は、卒業生の約八十%が酪農経営者あるいは酪農ヘルパー等生産現場で活躍されており、国民の食糧生産を担う酪農経営者の育成という大きな役割を果たし、ひいては食料自給率の維持、向上について一端を担っているものと自負しているところであります。

さて、次に本校の近況をお知らせしたいと思います。まず学生の状況であります。去る四月六日に第四十一期生の入学式を行い、酪農を志す三十一名(男性二十三名、女性八名)の若者が入学いた

しました。

出身地別の内訳は、構成県二十四名、構成県外七名で、本年度は例年に比較して構成県出身者の割合が高くなっております。又、構成県外の内訳は、東京都、千葉県、大阪府、福岡県、熊本県、宮崎県と広範に亘っております。

次に施設整備についてですが、かねてからの懸案でありました第一牧場搾乳牛舎を、農林水産省及び岡山県のご理解とご支援により本年度整備することとなりました。

設立当時からの施設で老朽化が著しく、又、時代の要請に応じた施設が求められていることから、各方面の牛舎を参考にしながら学生の教材にふさわしい施設として、現在の場所より西側に移転して建設をすることとしております。卒業生の多くの皆さんにとりましては思い出多い第一牧場搾乳牛舎ではないかと思いますが、来春には新しい牛舎に生まれ変わる事となっております。

第二牧場はほぼ整備が終わ

り新しい施設となっておりますが、県道南側の老朽化した旧育成牛舎の撤去及びその跡地をどう利用するかという問題が残っております。これにつきましても、関係者と協議しながら早い機会に、特に景観に配慮した利用方法について検討していきたいと考えております。

今年「晴れの国おかやま国体」が開催されます。

この蒜山地域では、山岳競技と馬術が行われますが、特に馬術につきましても、酪農大が馬術部として「馬事係」として学生、職員共々参画し、飼料の調達でありますとか荷物の運搬等を担当することとなっております。学生にとりましても良い思い出となるものと思っております。卒業生の皆さんもどうぞおいでください。

終わりに、各方面で活躍いただいております卒業生の皆さんの更なる飛躍を職員一同心からお祈りし、又、本校発展のため色々な方面からのご指導、ご協力を賜りますようお願いいたします。

第39期生卒業証書授与式

平成17年3月17日 (p8別表) が卒業。

理事長表彰 (とくに学業品行優秀な者)

土田 有香 (兵庫県)

全国農業大学校協議会表彰 (とくに成績優秀な者)

土田 有香 (兵庫県)

校長表彰

■ **優等賞** (学業品行優秀な者)

井上 玲美 (東京都) 栢橋 智香 (兵庫県)

重政 絵美 (山口県) 竹中 由布 (高知県)

■ **精勤賞** (遅刻欠席などがなく精勤に学習した者)

加藤 義幸 (広島県) 重政 絵美 (山口県)

土田 有香 (兵庫県) 村上 智子 (鳥取県)

■ **努力賞** (学業、学校生活すべてにわたり努力が認められた者)

富谷 智子 (岡山県) 守時 理恵 (岡山県)

吉川 知佳 (大阪府)

■ **就農激励賞** (卒業後直ちに就農し、今後その活躍が期待される者)

小橋 正和 (岡山県) 樋口 貴明 (岡山県)

平川 勝典 (宮崎県) 丸山 泰明 (岡山県)

村上 智子 (鳥取県)

■ **卒業論文賞** (卒業論文が独自性に富み、優秀であった者)

栢橋 智香 (兵庫県) 富谷 智子 (岡山県)

村上 智子 (鳥取県)

教務課
便り

第41期生入学式

平成17年4月6日、第41期生31名 (p8別表) が入学しました。

内訳は、男子学生23名、女子学生8名です。後継者が14名です。

出身地でみると、中国四国及び兵庫県が24名 (うち岡山県出身者12名)、その他地域は遠くは千葉から宮崎までの7名となっています。



第39期卒業生

酪農大学校の関係者と卒業生に感謝

前校長 古好秀男

謹啓



酪農大学校教職員の皆様方を始め、関係者の皆様方におかれましては、その後御健勝で御活躍のこととお慶びを申し上げます。

私ごとで大変恐縮ではございますが、今年三月三十一日を以て財団法人中国四国酪農大学校を退任致しました。思い起こせば酪農大学校長を通算八年間に亘り務めさせて頂きました。その間には、酪農を目指す若い担い手、後継者の養成に限りない情熱を傾注し携わって参りましたが、最近、各地で酪農大学の卒業生を訪問して見ますと、学生時代とは打って変わって顔付きも一段と引き締まり、地域の実質的な若きリーダーとして素晴らしい御活躍をしておられるお姿を見るにつけ、感動と感激で一杯であります。

勤務させて頂きました八年間には、農林水産省、農政局、岡山県、構成県、JRA、地全協、装蹄師会、中央畜産会、県畜産協会、酪農ヘルパー全国協会、真庭市、蒜山ライオンズクラブ、蒜山観光協会、蒜山商工会、おか酪、蒜酪、乳牛改良同志会、同窓会並びに関係者の皆様方には、あらゆる活動を通じて計り知れない程の御支援にあずかり、公私ともに大変お世話になりましたことを心から厚くお礼と感謝を申し上げます。特に平成七年

度から私の念願でもありました教育に対する教材整備一筋に情熱を注いで参りましたが、私の努力不足で一部の教材整備が出来なかったことを深くお詫びするとともに反省を致しております。しかしながら長年の懸案の一つでもありました第一牧場の搾乳牛舎の建設も関係者の御努力によって平成十七年度事業で整備される運びとなりましたことは、私の最大の喜びであります。

酪農大学校に勤務された先人たちの誰が考へ、実行されたのかは定かではありませんが、酪農大学校の実践教育システムは全国の酪農関係大学校の教育内容にも例のないもので、全国に誇れる二つの素晴らしい実践教育だと思えます。その一つは、毎朝五時三十分から始まる早朝搾乳、今一つは、三カ所の先進的酪農家において一カ所二ヶ月間に亘りファームステイをしながらの校外研修を長期間実施することです。勿論校外研修生を受け入れてくださった酪農家の皆様方の御協力に對しましては感謝の気持ちで一杯です。この校外研修は酪農大学校の実践教育の宝と云っても過言ではないでしょう。酪農大学校卒業生の皆さんは、母校の四十四年間の伝統に誇りを持って、輝かしい地域のリーダーとなって頂きたいと思えます。

最後になりましたが、酪農大学校の限りない御繁栄と関係者の皆様方の御健勝、御活躍を心から御祈念申し上げ、お礼と感謝の挨拶とします。

本当にお世話になりました。

敬具



新人酪農
ヘルパーより

第三十九期生 守時 理恵

私は、この春酪農高等学校を卒業し、地元岡山県のおからく津山支所蒜山地域でヘルパー職員として働いています。

私は酪農家に生まれ、牛舎が遊び場で子牛が遊び相手のような環境で育ちました。高校進学では、畜産か園芸かで悩みましたが、牛のことなら家でも学べると思い園芸科を選び、花・野菜・果樹の農業基礎を学びました。しかし、畜産について学びたいという気持ちが強くなり、この酪農高等学校へ入学しました。実家で見よう見まねで覚えたことが多少役に立ったとはいえ、何故そうすることが必要なのかという専門知識の無さにショックを受けたのを覚えています。理論がわかれば実践あるのみ、その大切さを学んだ二年間

だったと思います。

さて、皆さんから見ると「酪農ヘルパー」とは、どんな存在でしょうか。これまで、「ヘルパーサービスを利用する側」だった自分が、今度は「サービスを提供する側」に変わり、今はこの仕事特有の面白さと厳しさを味わっています。

子供の頃、夏休みなど友達の家旅行の話がうらやましく聞いていました。ヘルパー制度が発足し、一家揃って泊まりがけで出掛けられたことがとてもうれしかったのを覚えています。その時のヘルパーさんは、我が家の「安心」という存在でした。この頃から私のヘルパーへの憧れがありました。

私は現在、四十三ある蒜山地域の一軒一軒を順にまわるうち、覚えることだらけでよく



イラスト：宇時 理恵

「自分、テンパつとるで」と先輩ヘルパーさんにツッコまれます。そんな中でも、農家の方の「ヘルパーさん助かるわあ」という一言が、明日も頑張ろうと元気をくれます。

また、ヘルパーと同時にひとり暮らしも始まり、ひとのやさしさを感じずにはいられませんが、仕事を始めて間もなく高熱で寝込んだ折には、親戚と友人が「困ったときはお互い様」と看病してくれ、後日お隣の酪農家や関係の方々から、「聞いたで、大丈夫か?」と苳やシュークリームを片手に見舞って下さいました。酪大在学中には感じなかったことも、ひとり暮らしを始めて気づかされたことが沢山あります。周囲に助けられて今の私があるということ。そして、ヘルパーという職業を通して人を助けられる存在になりたい、技術面だけでなく人間として成長していきたいという思いがあります。

私たち三十九期生も各地でみんな頑張っております。牛を愛する全国の同志の皆さん、日本の酪農の明日を信じてがんばりましょう!

入学するまでの
自分にバイバイ

第四十期生 小谷 真大

酪農高等学校での一年間を振り返ると、「たくさんのことを学んだなあ」ということに尽きます。一番強く学んだのは、酪農の楽しさ・厳しさです。僕の家も、酪農を経営していますが、酪大に入学するまでは、本心では酪農みたく大変な仕事はやりたくないという気持ちもけっこうありました。しかし、入学してから、毎日の講義で専門的なことを学習したり、牧場での実習のなかで牛に接しているうちに、僕も卒業したら実家の酪農を継いで、酪農をやりたいと考えるようになりました。

酪農高等学校での実習は、第一牧場での真夏のコーンサイロ落とし、大雪の中でのパドックの糞取り、第二牧場での放牧のための有刺鉄線張りや出産後の手搾り、雨の中の放牧など、キツいけれどどれも取っても、かけがえない体験となりました。

その他にも、重い牛の足を持ったの削蹄実習、牛の毛刈り実習など酪農には欠かせない技術を学べました。(習得できたかは別ですが...) そんな実習や作業も、友達との助け合いや協力があって出来たのだと思います。

もうひとつ、毎日早朝から夜遅くまで友達と話をしたり、将来の自分の夢の話をしたことも沢山あり、その一つ一つが僕の



ポプラ並木を疾走!!

宝物となりました。

時には意見が合わず、揉めそうになったこともありましたが、我慢することも学びました。そして、中国地区農業高等学校交流として開催されたソフトボール大会では、結果は最下位と淋しいものになりましたが、クラスメイトがひとつになり、勝負することができました。

酪農高等学校の一年は、ほんとうに早く、あっという間に過ぎていきました。そして、両親と離れて生活して初めて、親のありがたさを知りました。

僕はまだまだ生半可な人間ですが、これから始まる校外研修などで、人間的に大人になって沢山の技術を身につけ、卒業したら父親といっしょに酪農を経営して、立派な酪農家になりたいと思っています。

●私の夢は「酪農家」

中国四国酪農大(現二年)
田中あゆみ

私の両親は宮崎県で酪農を営んでおり、現在成牛五十頭、育成牛三十頭を飼育しています。

私は二人兄弟の次女として生まれ、酪農を営む父と母の背中を毎日見て育ちました。幼い頃から姉や弟よりも牛に興味があった私は物心ついた時から牛舎が遊び場になっており、常に牛を見ながらの毎日でした。いつも見る牛たちは、自分の家族の様な存在で、牛を怖がるということも考えたこともありませんでした。それほど私は、小さい頃から牛が大好きだったのです。

それから、成長するにつれ、小学校に入学したころには、牛が大好きという以上に、両親の様に牛の世話をしたいという気持ちを持ち強く抱くようになりました。しかし、当時まだ背の小さかった私は、危険だからという理由で、糞かき位しかさせてもらえず、子供ながら悔しい思いをしたのを覚えています。そのため、搾乳する父の後をついて回り、タオルを渡したり、消毒薬を渡したり、出来ることを精一杯やりました。

この頃の私の小学校から帰った後の日課は、家に帰ると小さな赤い長靴に履き替えて一目散に牛舎に行くことでした。当時、小学生の私にとって酪農は、何もかもが新鮮で珍しく、興味深いものばかりで、父や母の話を聞いたり、質問をしたり、牛舎の中を歩き回ったりと、いつも牛の側で過ごす毎日でした。

小学校五年生になった時、道路拡張のため、牛舎を移転すること

になりました。両親の希望もあってフリーストール牛舎が建ちました。何もかも見たことのない器具機械で、私は眼を輝かせて新牛舎に見入っていました。

「すごいー」私はその一言しか頭の中にも口からも出てきませんでした。そして新築の牛舎の中に牛が入り、慣れない通路を私以上にうれしそうに走り回っていた牛の姿は、今でも目に焼き付いています。

「牛も新しい家に住めてうれしんだな。」
「やっぱり牛も人間と同じなんだ。」
と思わずつぶやいていました。

この時、自分がされて嫌なことは牛にすべきでないということ、牛もうれしいのだという、牛飼いの原点を子供ながら感じたものです。また、思い起こすとその言葉は、以前から両親に聞かされていた言葉そのものでした。

このころから、学校を卒業したら牛の世話をしたい、両親の様に牛に優しい経営をしたいと考えるようになっていきました。この考えは中学になってからも益々、強いものになっていきました。

そして、中学三年生の時、進路相談で「将来、何になりたいか?どんな学校に行きたいか?」などと聞かれ、当然「酪農家になりたい。農業高校に行きたい」と躊躇なく答えていました。先生からは「頑張りなさい。夢があることはすばらしいことです。」と励ましの言葉がありました。私の姉も近くの農業高校に通っていたので、私が希望する畜産科の内容も良く聞く機会がありました。しかし、その話を聞いている内に、次第に「これで、いいのかな?」という迷いが心の隅に芽生えて来たので

オメデトウ

す。なぜかと言うと私は酪農の勉強がしたかったからです。近くの酪農高校の畜産科では、鶏、豚、乳牛、和牛など様々な畜産系の勉強を広く学ぶようになっていきました。一年生から、色々な動物に触れて勉強し、三年生になってやっと、その中のどれか一つを選択できるシステムになっています。私は、酪農の勉強を出来るだけ早くしたかったので、迷いの気持ちが生み出されたのだと思います。

近くの酪農高校に行くことに乗り気でなかった私に、母があるパ

ヤンマー学生懸賞作文

昨年にも続きまたまた銀賞入賞!

第40期生の田中あゆみさんが書いた作文が、平成16年ヤンマー懸賞作文大賞で銀賞を授賞しました。昨年の38期生砂田恵さんに引き続き、2年連続の銀賞受賞です。酪農家に生まれた田中さんが牛との関わりを表現しています。(全文掲載)

ンフレットを見せてくれました。それは酪農に関する勉強だけが出る学校の資料でした。私は、そのパンフレットを一目見るなり「これだー」と思いました。

でも、その学校は、宮崎から遠く離れた北海道にある学校だったので。それを見て、また私は考えました。そこに行くか今度は金銭的に両親に迷惑をかけてしまうと考えたからです。でも、両親はそれを覚悟の上で、私にそのパンフレットを差し出してくれたのです。両親は、考え込んでいる私に、

おめでと

ーであるヘンリック氏が言った言葉にも一度、びつくりしました。私たちが二人に搾乳を全部任せると言ったのです。戸惑いが隠しきれない私たちがしたが、「二人で力を合わせれば、私たちの思いも牛たちにも通じるよ」と自分たちに言い聞かせ、それから五日間を夢中で頑張り、何とかやり遂げることが出来ました。「牛の気持ちになって考える」この精神での毎日、私の牛への思いも一層深まって行きました。この遠い異国での酪農経験は、わずか五日間ではありましたが、私を一層成長させると共に、将来、酪農に携わりたいという夢をより強固なものにしてくれたのです。

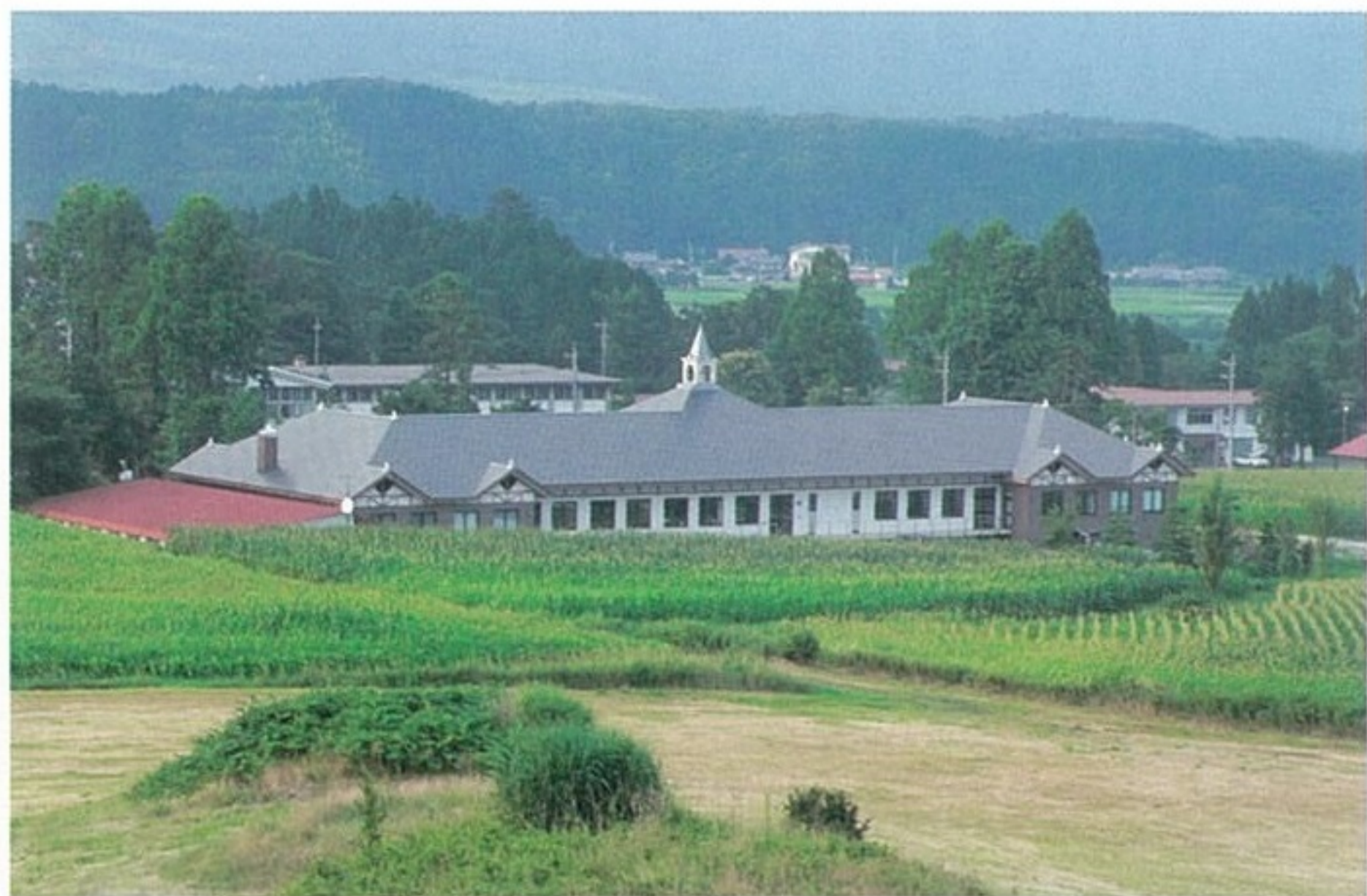
そして、将来のことを考えた末、岡山県の蒜山にある酪農専門の大学である「財団法人中国四国酪農大」に進学を決めました。

平成十六年四月、無事入学し、現在、酪農経営を実践的に学び、日々の実習、作業に懸命に取り組んでいます。

入学して早、半年、現在も入学当時と変わらない気持ちで毎日頑張っています。その中で牛の行動や、草の成分など、ちょっとしたことだけでも、色々な新しい発見があり、楽しい毎日を送っています。

そして二年生になると、いよいよ六ヶ月間の校外研修が始まります。全国の先進酪農家での研修なので楽しみですが不安もあります。そんな時、あの小さかったころの牛への思いや両親の顔と言葉を今一度思い出しながら牛に接したいと考えています。

そして、私の「酪農家になりた」という夢に一步でも近づけるよう、この大学での日々を精一杯過ごしたいと考えています。



2番草刈り取り後、草地から見た本校

今年度、建築予定の牛舎は、五十頭を繋留するタイストール式でパイプラインミルカーでの搾乳を予定しております。現在、関係機関等を交えて教育機関としてふさわしい施設を目指して計画を立てているところで、皆様方にも完成を期待して

頂きたいと思っております。さて、酪農経営を営んでいる方の悩みのひとつに尿の処理があるのではないのでしょうか。昨年度から、「海と渚環境美化推進機構」が事業主体となり本校第一牧場で尿処理施設の実証展示事業が行われていきます。これは、貝殻を利用した浄化システムで、貝殻に付着する微生物の浄化機能を利用し、放流できるまで処理するものです。貝殻は水産業では廃棄物であり、廃棄物で畜産業から出る

この学園だよりが発行になるころには、本校では真夏の炎天下、二番草の収穫が終わっている頃ですが、卒業生の皆様におかれましては、お忙しい日々をお過ごしのことと存じ上げます。

第一牧場では今年度、悲願でありました搾乳牛舎の改築を控えております。現在の搾乳牛舎はみなさんもご承知のとおり、本校開学当時から建物であり、フリーバーン牛舎から対頭式三十四頭繋留タイストール牛舎への改修が行われ、現在に至っております。



貝殻を利用した畜舎排水システム

廃棄物を浄化するという一石二鳥のシステムです。西日本では、酪大の他、愛媛県畜産試験場で実証展示がされておりありますが、酪大の機械は、岡山県特産のカキの殻を利用して前校長のアイデアにより尿を加熱し、消臭等の効果が図られる機能も新たに加えられると思っております。皆様にも利用される良い結果が出ればと

思っております。最後になりましたが、搾乳牛舎が完成するのは年度末近くになると思いますが、尿処理施設など、新しいものも出来ておりますので、卒業生のみならず、お近くに寄られた際には、お立ち寄りください。なお、今年度は山田徹夫課長、岡田英樹場長、樋口照夫助手の三名で担当しておりますので、よろしく申し上げます。

飼養頭数

H17.4.1 現在

区分	第1牧場	第2牧場
経産牛	45	81
育成子牛	31	65
乳用牛計	76	146
肥育牛	30	0
繁殖和牛	2	0
肉用牛計	32	0
合計	108	146



第2牧場 遠景

の被害があり、第二牧場周辺では二日半の停電が続きました。停電時にはパーラーはもちろん、バルククーラー、バートンクーラーなどなどほとんど全ての施設が稼働しなくなり、改めて電気の実

また暑い夏がやってきましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。昨年夏には、ここ数十年お目にかかった事がないような大きな台風に見舞われ、ポプラの倒木、倉庫の屋根が飛ぶなど建築物



ありがとうございました。幸い、発電機によって搾乳は行うことができ、何よりも牛や人への被害が無かったことが救いでした。現在は施設の修理も終わり、傾いた牧柵を見ると思い出す程度となりました。

の播種を行いました。チモシーは寒冷地での生育に適しており、蒜山地域でも作付け農家が増え始めています。そのため、岡山県の品種選定試験の実証試験として二種類の品種を播種しています。播種は台風の影響で十月下旬となりましたが、その後の冷え込みが少なく無事に発芽し、現在は順調に生育しています。今後は収量や次年度以降の生育をみる予定です。



チモシー刈り取り風景

この四月に新入生が入り、恒例となった白樺植樹が四月十三日にポプラ並木で行われました。また、初放牧は昨年とほぼ変わらず四月の十九日に行われ、十一月から約半年ぶりに放牧された搾乳牛は慣れたもので報道陣のカメラも気にせず元気に走り、草をはんでいました。第二牧場職員は昨

職員紹介

校長 有富 敬典 ○
副校長 西家 純一
(教務課長兼務)

総務課

課長 新免 眞哲

主事 有富 英美
事務員 法花千恵美

教務課

主任 西 淳子

技師 溝口 泰正 ○
池田 良弘 ○

調理員 講元 勝代
石原 峯子
谷口 育子

経営課

課長 山田 徹夫

第一牧場長 岡田 英樹 ○

助手 樋口 照夫

第二牧場長

坂部 吉彦

技師 芦田 草太 ○

長綱 則之 ○

小橋 和栄 ○

助手 磯田 博

○印は新職員

○印は内部異動者